

# 新聞の4コマ漫画における音象徴語

金 裕 成

## I. はじめに

日常の会話で耳にする音象徴語は、生き生きした表現によって話がかどることも、相手との親しみを表すこともできる。このような音象徴語は、たとえ耳慣れない語が使われたとしても、それまでの話の文脈や話し手の表情・身振りなどから大体理解できるものであろう。

さて、日本語の中には、数多くの音象徴語が存在している。音象徴語だけを収録している辞典の項目を見てもすぐ気付くであろうが、辞典に載っていない語もかなりあり、そのような音象徴語も頻繁に使われていると思う。

ある代表的な小型国語辞典の見出し語（そのうち、“す”の部分に載っている語）を『擬音語・擬態語辞典』<sup>①</sup>と比べた結果がある。

擬音語・擬態語辞典だけにある語：46語

国語辞典にもある語：42語

国語辞典だけにある語：2語（ずい、ずっ）<sup>②</sup>

この結果だけを見る限り、国語辞典に載るものは、『擬音語・擬態語辞典』の約半分ということになる。しかし、国語辞典にせよ、『擬音語・擬態語辞典』にせよ、どちらも語の選択から出版までの長い期間があることや臨時的・俗語的性格などを切りすてる傾向のあることを考えると、現在日常生活などで用いられている、本当に生き生きした語は採られていないことがあると思われる。

従って、本稿は、出版されているものの中では、もっとも生き生きした表現を使っているとと思われる漫画を資料として、実際どのような音象徴語がどれくらい使われているかについて、その実態を把握しようと思う。

## II. 調査の概要

漫画には、1コマ漫画も、4コマ漫画も、またストーリー漫画もあり、名称にしても、

劇画と呼ばれる分野があったりコミックと呼ばれることもある。すべての出版物は、対象と目的によって、用いる言葉も、内容の質も異なるといえようが、漫画はもっともその幅が広いものの一つと思われる。本稿では、比較的言葉の偏りも少なく、内容の質も高いと考えられる新聞の4コマ漫画を対象にした。

調査の対象は、1997年1月から1999年12月までの読売新聞における4コマ漫画の計634日分である。読売新聞（以下、新聞と呼ぶ）4コマ漫画のタイトルと作家は、表1〉のようであり、年度別の延べ語数及び異なり語数は、表2〉のようになる。

表1〉

区分	タイトル	作家	日数
朝刊	コボちゃん	植田まさし	428
夕刊	サンワリ君	鈴木義司	206

表2〉 新聞漫画における年度別の音象徴語

	語数	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍	8拍	9拍	10拍	11拍	合計
97年	延べ語	1	99	78	220	23	20	2	5	1	0	1	450
	異なり語	1	54	54	114	10	15	2	3	1	0	1	255
98年	延べ語	0	116	53	201	19	17	9	0	0	1	0	416
	異なり語	0	57	36	100	11	9	2	0	0	1	0	216
99年	延べ語	0	85	81	237	20	19	3	0	2	0	0	447
	異なり語	0	40	49	115	9	12	3	0	2	0	0	230
合計	延べ語	1	300	212	658	62	56	14	5	3	1	1	1,313
	異なり語	1	115	106	242	20	28	7	3	2	1	1	526

資料は、各々の縮刷版を利用し、調査方法は、背景である地の文や、登場人物の言語表現の中に用いられているすべての音象徴語を抽出する。

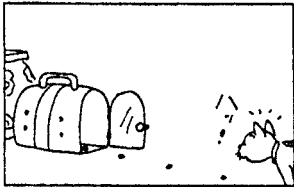


図1 980122(朝)

漫画の登場人物（主体）は、人間だけとは限らない。人間以外の動物であっても、その動物が発した鳴き声はもちろん、地の文に用いられている動作や状態を表したもの（図1）、そして吹き出しの中の言語表現（対話、反応）なども抽出した。

しかし、「音象徴語を研究対象とする限りは、音象徴語と一般語彙の非音象徴語との識別のための条件、換言すれば音象徴語認定の基準について吟味・考察を行う必要があるはずである<sup>③</sup>」が、ここでは、音象徴語であると考えられる語を抜き出し、「動詞の連用形の畳語」とか、「形容詞の語幹の畳語」（図2）・「アルファベットを用いたもの」（図3）などのようなものを除外していく方法をとるこ



図2 990311(朝)

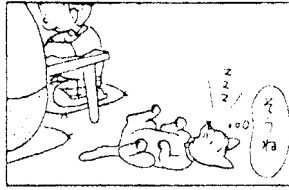


図3 990703(朝)

とにした。選んだ音象徴語は、天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』(以下、辞典と呼ぶ)等と比較することにする。

### Ⅲ．4コマ漫画の音象徴語の特徴

日本語の表記について、玉村文郎氏が、

「通例片仮名によって表される語を片仮名語」として、「ドシン、ピューピュー、パチン」などの「擬音語」をここに含め、「ギラギラ、ピカリ」のような擬態語は「平仮名書きが普通である」<sup>④</sup>

と指摘されているが、新聞の4コマ漫画の中の音象徴語は、強調の効果を高めようとするためか、擬音語・擬態語どちらも片仮名書きが圧倒的に多い。即ち、延べ語数1313語のうち、平仮名書きは13語しか見られない。しかも、その中の12語はすべて吹き出しの対話文の中の例であり、地の文のケースは1例(図4)しかない。



図4 970520(朝)



図5 970812(朝)

また、日本語では普通「ん」で始まる語は見られないが、4コマ漫画のような場合にはいびきを表す「ンゴ」のような特別な用例(図5)が現れている。

#### 3.1 拍数別の音象徴語

拍数の平均は、3.58拍であり、辞典の3.78拍と大きな差はない。しかし、辞典と比較して、目立つ特徴は2拍語の占める比率が高いことである。その理由は、図6のように擬音語が多く使われていることと、限られた紙面の中で、作家の意図を強烈に、かつは

表3)

対象	区分	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍	8拍	合計
新聞	延べ語数	300	212	658	62	56	14	5	1,313
	異なり語数 (%)	115 (21.9)	106 (20.2)	242 (46.0)	20 (3.8)	28 (5.3)	7 (1.3)	3 (0.6)	526 (100.0)
辞典	異なり語数 (%)	107 (6.8)	499 (31.9)	766 (48.8)	64 (4.3)	111 (6.9)	2 (0.1)	18 (1.2)	1,567 (100.0)

(新聞の合計は、1拍語・9拍語・10拍語・11拍語まで含めた数字である)

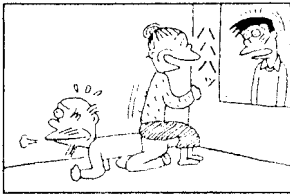


図6 990108(夕)

つきり伝えようとするためであろう。

なお、辞典においては、以下に示したような20語は、語末に促音がついた形とか、あるいは4拍置語の形で載っているが、語基それ自体としては載っていないのも、もう一つの理由であると思う。

「カチ、ガチャ、ガバ、クー、グシュ、シー、ゾー、ドー、ニヤー、ヌー、ハー、パカ、パザ、バシャ、バチャ、ピタ、フー、フニヤ、ブー、ベリ」

また、「ギギ、キュイ、グシュ、ソー、チョピ、パキ、ピシャ、ブシュ、ブチ、ベシ」の10語は、どのような形で載っていない。

このような2拍語の顕著さは、新聞漫画のみが持っている特徴と言える。

### 3.2 音象徴語の型

音象徴語には、3・1でも見られるように4拍語から成るものももっとも多いが、2拍語・3拍語から成るものを合わせると、新聞・辞典どちらもこの三つの種類が全体の9割近くを占めることになる。

このように音象徴語のほとんどであるとも言える2拍・3拍・4拍語を型別に分類し、その語数と比率を表すと表4ようになる。参考のために、日向茂男編『擬音語・擬態語の読本』の型を分類した結果と比較<sup>⑤</sup>してみることにする。

仮に、新聞における音象徴語の型の順位を10位まで並べると、ABAB・AB・A・ABッ・ABン・Aッ = Aーん・Aん = AッBリ・AッAッ = A A = AリAリ = AB ) のようになる。このうち、読本における音象徴語の型の10位までと重なるものは、下線を引いた8つの型であることが分かる。

一番多いのは、新聞漫画においても、読本においても、音象徴語の標準形(?)とも言えるABAB型であるが、その割合には大きな差がある。これは、4コマという限られた紙面の中で、動きを描く漫画の特性をより一層活かすために、AB型をもっと積極

表4)

拍	型	新聞		読本		拍	型	新聞		読本	
		数	%	数	%			数	%	数	%
2	Aン	14	2.7	12	1.4	4	AッAッ	13	2.5	11	2.1
	Aッ	16	3.0	29	3.5		A A	13	2.5	35	4.2
	A	33	6.3	2	0.2		AリAリ	13	2.5	22	2.6
	AA	2	0.4	2	0.2		AンBリ	3	0.6	20	2.4
	Aリ	5	1.0	0	0		AッBC	1	0.2	3	0.4
	AB	45	8.6	5	0.5		AッBリ	14	2.7	75	9.0
3	AッA	3	0.6	5	0.5		AッBン	4	0.8	1	0.1
	AッB	2	0.4	3	0.4		ABCン	0	0	1	0.1
	AAン	0	0	4	0.5		ABCD	0	0	13	1.6
	AAッ	1	0.2	0	0		ABCB	0	0	18	2.2
	ABッ	29	5.5	81	9.7		ABンC	0	0	1	0.1
	ABリ	4	0.8	31	3.7		AA ッ	1	0.2	1	0.1
	ABン	18	3.4	33	3.9		AB ッ	3	0.6	1	0.1
	ABB	1	0.2	3	0.3		AB ン	12	2.3	1	0.1
	A ン	16	3.0	6	0.7	ABBン	1	0.2	1	0.1	
	A ッ	10	1.9	11	1.3	ABBB	3	0.6	2	0.2	
	AAA	5	1.0	0	0	AAAA	8	1.5	2	0.2	
	A A	2	0.4	0	0	AAA	2	0.4	0	0	
	AB	13	2.5	0	0	ABB	1	0.2	0	0	
	A B	2	0.4	0	0	AッBB	1	0.2	0	0	
4	ABAB	136	25.9	321	38.4	AA ン	1	0.2	0	0	
	AンAン	11	2.1	36	6.8	AAAッ	1	0.2	0	0	

(仮に、「ンゴー」はAB 型に入れた。)

的に使っているからであると考えられる。

### 3.3 語頭の子音

一般語彙の音素分布については、「和語2拍名詞の出現位置別に見た音素頻度表<sup>⑥</sup>」があり、そのうち、語頭に立つ子音の構成比は、/k/(13.5%) /s/(11.3%) /t/(11.0%)..... /p/(0.2%)の順になっている。なお、和語3拍名詞についても、/k/(15.8%) /h/(12.1%) /t/(11.5%)..... /p/(0.2%) /r/(0.1%)の順であるという先行研究<sup>⑦</sup>がある。

さて、音象徴語の場合、辞典は、/g/(15.1%) /p/(14.4%) /k/(12.4%) /b/(9.3%).....の順であり<sup>⑧</sup>、新聞漫画は、表5)のとおり、/p/(14.4%) /g/(14.1%) /b/(12.0%) /k/(11.2%).....の順になっている。従って、どちらも音素/p・b・k・g/が語頭に立つ子音の順位4位以内に入っていることが分かる。

これを見ると、一般語彙と音象徴語の語頭に立つ子音は正反対であり、特に、一般語彙においては、最下位であるとも言える音素/p/が音象徴語においてはトップに立っ

表5) 新聞漫画における語頭の子音及び語末の「り,っ,ん」

		1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍	8拍	9拍	10拍	11拍	合計
語頭	X	0	2	2	15	3	0	1	0	1	0	1	25( 4.8%)
	k	0	11	11	30	1	5	0	0	0	1	0	58( 11.2%)
	g	1	16	17	34	2	3	1	0	0	0	0	74( 14.1%)
	s	0	4	9	22	0	2	0	0	0	0	0	37( 7.0%)
	z	0	10	7	23	0	1	0	0	0	0	0	41( 7.8%)
	t	0	5	8	14	2	5	0	1	0	0	0	35( 6.7%)
	d	0	4	9	12	1	2	0	0	0	0	0	28( 5.3%)
	n	0	3	2	9	0	1	0	0	0	0	0	15( 2.9%)
	h	0	8	9	13	5	1	2	0	0	0	0	38( 7.2%)
	b	0	19	13	24	2	3	1	1	0	0	0	63( 12.0%)
	p	0	26	15	30	2	2	0	1	0	0	0	77( 14.4%)
	m	0	6	4	8	0	1	0	0	0	0	0	19( 3.6%)
	r	0	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0	5( 0.9%)
w	0	1	0	6	2	2	1	0	0	0	0	11( 2.1%)	
合計		1	115	106	242	20	28	7	3	1	1	1	526( 100.0%)
語末	り	0	5	4	31	0	1	0	0	0	0	0	41( 7.8%)
	っ	0	16	40	17	3	5	0	0	0	1	0	81( 15.4%)
	ん	0	14	34	29	3	6	1	1	0	0	0	88( 16.3%)
合計		0	35	78	77	6	12	1	1	0	1	0	208( 39.5%)

(仮に、「ンゴー」を「X」に入れた。)

ていることが分かる。

### 3.4 語末の特徴

音象徴語の語末はかなり特殊である。

日向茂男氏監修の『擬音語・擬態語の読本(以下、読本と呼ぶ)』(約1200語収録)に、次のように書かれている。

本書収録語の語末を見ると、多い順に、「り(18%) っ(16%) ん(14%)」という結果になっている。「っ」や「ん」が多いのは容易に想像がつくが、「り」がトップであったのはやや意外というべきか。ともあれ、ラ行音や促音・撥音が、擬音語・擬態語の持つ、音と意味との必然性という特性を演出している大きな要素となっているようだ。この三つの音節が、擬音語・擬態語の半数の語末を支配しているということになる。<sup>⑨</sup>

しかし、表5)から、新聞の音象徴語の語末を見ると、多い順に、

「ん(16.3%) っ(15.4%) り(7.8%)」

という結果になっており、このうち、「り」だけを比較して見ると、読本の半分にも及

ばないことが分かる。これは、「り」のほうがやや文語的であり、「っ、ん」のほうが俗語的なものなので、漫画では多く使われていると考えられる。

また、表4)のABり型とAB型との割合を見ても分かるように正反対の結果になっている。この結果を考えると、新聞において状態をつくる「り」が少ないことは、動作の一コマを切りとる新聞漫画の特性であるとも考えられよう。

#### IV. おわりに

以上、見てきた新聞4コマ漫画について、音象徴語の使用実態と音韻の特徴についてまとめると、以下ようになる。

拍数別の音象徴語は、辞典に載っていない語が10語もあり、語基それ自体としては載っていない語が20語もあるので、辞典に比べると、新聞4コマ漫画では2拍語の比率が3倍以上にもなっている。

音韻の面においては、一般語彙の語頭にはあまり見られない音素 /p/ がトップであった。また、語末の「り」は、辞典と読本のどちらもちばん高い比率であったが、新聞4コマ漫画においては最下位であることが目立つ特徴といえる。

語型は、一般的であるABAB型が一番多いが、読本とは違ってAB型もABAB型に次いで多く使われている。

今回は、異なり語の形だけにとどまったが、延べ語・意味との関係などについては今後の課題としたい。

#### 注

- ① 中道真木男, 「辞書にある擬音語・擬態語」, 『擬音語・擬態語の読本』, 小学館, 1991, p. 162
  - ② 中道真木男氏が, どんな『擬音語・擬態語辞典』と比べたのか確認できない。しかし, 「ずい」は, 天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』と浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』どちらにも載っていることが確認できた。
  - ③ 玉村文郎, 「有契化と無契化 音象徴語の語形(その2)」, 『日本と中国 言葉の梯 佐治圭三教授古希記念論文集』, 佐治圭三教授古希記念論文集編集委員会編, 2000, p. 12
  - ④ 玉村文郎, 『語彙の研究と教育(下)』, 国立国語研究所, 1985, p. 125
  - ⑤ 平 弥悠紀, 『『日葡辞書』と『和英語林集成』における音象徴語』, 『同志社国文学』40号, 1994, pp. 151-153
- なお, 論者の「AッBラ型」は, 筆者が「AッBC型」に変更して数えたものである。
- ⑥ 玉村文郎, 『語彙の研究と教育(上)』, 国立国語研究所, 1984, p. 25
  - ⑦ 入江さやか, 「現代日本語における和語3拍名詞について」, 『同志社国文学』43号, 1996,

pp. 99-100

本文のデータは、下一桁に書き直したものである。

- ⑧ 拙稿, 『『擬音語・擬態語辞典』における音象徴語の音韻構造』, 『同大語彙研究Ⅰ』, 1999, p. 19
- ⑨ 日向茂男, 『擬音語・擬態語の読本』, 小学館, 1991, p. 306

(参考文献)

- 入江さやか (1996), 「現代日本語における和語3拍名詞について」, 『同志社国文学』43号
- 金田一春彦 (1967), 『日本語音韻の研究』, 東京堂出版
- 金田一春彦 (1978), 「擬音語・擬態語概説」, 浅野鶴子編 『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 玉村文郎 (1984・1985), 『語彙の研究と教育(上・下)』, 国立国語研究所
- 玉村文郎 (2000), 「有契化と無契化 音象徴語の語形(その2)」, 『日本と中国 言葉の梯 佐治圭三教授古希記念論文集』, 佐治圭三教授古希記念論文集編集委員会編
- 日向茂男 (1986), 「漫画の擬音語・擬態語(1)」, 『日本語学』7月号, 明治書院
- 日向茂男 (1991), 『擬音語・擬態語の読本』, 小学館
- 平 弥悠紀 (1994), 「『日葡辞書』と『和英語林集成』における音象徴語」, 『同志社国文学』40号

(付記)

指導教授でいらっしゃる玉村先生には、いつも親切で細かいご指導をいただいておりますので、この紙面を借りて深謝申し上げます。本稿は、同志社国文学会(2000年6月18日)での口頭発表をもとにしたものです。席上ご教示いただきました向井先生をはじめとする方々に感謝の意を表します。なお、成稿にあたって、玉村先生と藤井先生にご指導をいただき、お礼を申し上げます。